

# 肉用牛農家の家畜飼養方針と開発，市場のかかわり

## —北上高地北部における日本短角種飼養の事例から—

平成 19 年度入学  
派遣先国：日本（岩手県）  
泉 直亮

キーワード：和牛，少数派，品種改良，在来の知識，母子放牧，飼養方針

### 対象とする問題の概要

わたしの調査対象は，北上高地北部における日本短角種（以下，短角牛）飼養である。短角牛は和牛（食肉用品種）の 1 品種であり，この地域を中心に飼養されている。また短角牛は和牛飼養頭数のシェアの約 1% を占めるのみの，マイナーな品種である。

食の安心・安全の問題に世間の関心が高まるなか，脂肪の少ない肉質や人工配合飼料を給餌しない飼養方式の面で，短角牛は近年とくに注目を集めている。それをうけて岩手県では，短角牛を県の特産品として売り出すために力をいれている。

しかし消費者側からの需要が増加していて，短角牛の子牛価格は上昇しているにもかかわらず，供給側である短角牛飼養農家（以下，短角農家）の戸数と飼養頭数は減少傾向にある。この問題は，短角農家と産業開発や市場経済との関係から理解されなければならない。そのさい，これまで無視されがちであった短角農家の実状にとくに焦点をあてる必要がある。

なお，調査地の行政区分は，岩手県下閉伊郡岩泉町安家地区（写真 1，写真 2）である。



写真 1 安家地区の景観

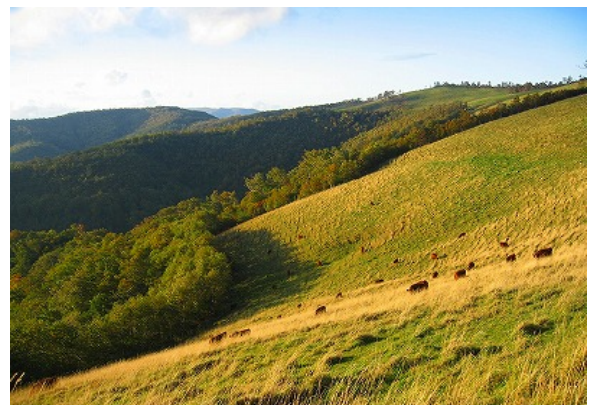


写真 2 短角牛放牧の風景

### 研究の目的

本研究では，全国農業協同組合連合会岩手県本部（以下，全農いわて）が主導する短角牛の繁殖用メ

ス牛の改良方針と、短角農家の改良方針が対立するところに着目し、両者の対立の構図を詳細にえがき出すことを第一の目的とする。そして短角農家の在来の知識や技術をあきらかにし、両者の改良方針のちがいが、子牛の価格や成長とどのように関係しているのかを比較検討する。

第二の目的は、肉用牛市場と短角農家の飼養方針の関係をあきらかにすることである。牛肉の格付等級による価格決定に注目すると、短角牛の子牛の平均価格は今までに大きく変動してきたし、子牛価格のバラつきも大きく変わってきたことがわかる。本研究ではこうした変動に、短角農家がどのように対応してきたかを示す。

また本研究で得られた成果を、日本の畜産の問題と、過疎化のすすむ山村の産業がかかえる問題を考える一助としたい。

## フィールドから得られた知見

短角農家が所有する繁殖用メス牛の改良方針を指導するのは、おもに全農いわてである。この指導は、短角農家にとっては外部からの介入であること、近代科学を基礎にしていること、そして一律の基準に統一するうごきであることの三点から、開発であるといえる。

全農いわての改良方針を農家が実践し、評価を得るためにもっとも重要なイベントは共進会（全農いわて主催の品評会、写真 3）である。共進会の審査対象となるのは、肉用牛生産の基盤となる繁殖（再生産）用のメス牛であり、その審査基準は、日本短角種登録協会が定める日本短角種審査標準にもとづいている。共進会の審査でもっとも重視されるのは、牛の枝肉となる部位（体幹部位）の肉づきである。

一方で、多くの短角農家にとってのよい繁殖メス牛の条件とは、子牛を大きく育てられることである。この意見は、短角牛の生態的特徴と、この地域の飼養方式の相補的關係性に由来する。つまり短角牛は、粗飼料でもよく成長し濃厚飼料の効果が小さい、泌乳量が多く哺育能力が高い、といった母子放牧に適した特徴をもつため、母子ともに夏山冬里方式<sup>1</sup>で飼養される。そのため子牛の成長にとっては、母牛の哺育能力が決定的に重要なのである。そして多くの短角農家が、母牛の乳（乳頭と乳房）の形状と乳量を最重要視する（写真 4）。

子牛の成長率は短角農家の収入に直結する。メス牛を飼養し、その当歳子牛を出荷するのが繁殖牛経営の基本形態だからである。原則として、飼養されているメス牛は健康で子を産むかぎりには売却されないで、短角農家には母牛の肉づきが立派である必要はないと考えられている。

以上から、短角農家と全農いわての改良方針を比較すると、両者の対立の構図があきらかになった。では、(a) 共進会で入賞したメス牛、(b) メス牛の乳をもっとも重視する短角農家のメス牛、(c) メス牛の乳を重要視しない短角農家のメス牛、それぞれの子牛は市場ではどのような結果を残しているのだろうか。

表 1 は 2007 年 10 月 30～31 日に開催された短角牛子牛市場に出品された子牛の体重と 1 日あたりの増体量、そして価格をあわらしている。すべての項目において、(b)、(a)、(c) という順になっている。なお安家全体の平均値は (a) よりも高い。

このことはつぎの 2 点を示している。第一に、全農いわての改良方針よりも安家の短角農家による改良方針のほうが、市場での数値で上まわっている。安家の短角農家のなかには「共進会に入賞する牛は、

---

<sup>1</sup>気候が温暖で牧草が豊富な夏季には、農家の日常的な管理から離れる牧草地に家畜を放牧し、寒冷で牧草が乏しい冬季には、農家の日常的な管理下にある里山や牛舎で家畜を管理する飼養方式

母牛として活躍しない」といって、共進会に不信感をいだいているものが多いが、子牛の市場価格はこの意見を支持している。そして第二に、メス牛の乳を重視する短角農家の子牛は、乳を重視しない短角農家の子牛よりも市場成績が高い。以上から、多くの安家の短角農家は全農の指導に頼らず、在来の知識から創造した改良方針によって市場で利益を得ていることがわかる。農家を指導するはずの全農と短角農家の家畜改良方針が相違している状態は、技術的な面でも生産農家の意欲の面でも、地域の畜産振興にとって大きな障害となるだろう。

表 1 短角牛子牛市場の平均値

	出品頭数	体重(kg)	増体率	価格(千円)
(a)	10	259	1.16	274
(b)	58	275	1.20	293
(c)	14	231	1.08	256
安家全体	72	265	1.17	279
市場全体	656	242	未算出	267

※増体率=体重/日齢 ※(a)(b)(c)は本文を参照



写真 3. 共進会のようす

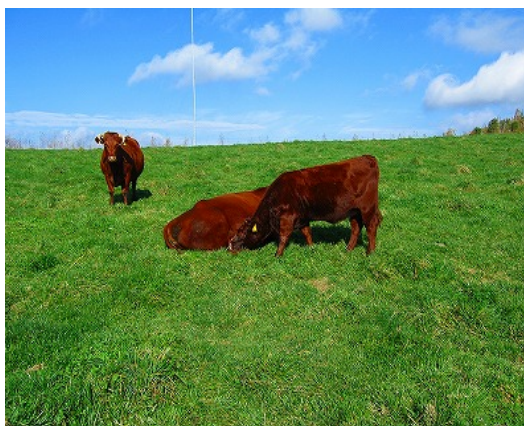


写真 4. 母牛の乳を飲む子牛

### 今後の展開・反省点

今後は、本研究の第二の目的としてあげた、短角農家の飼養方針と肉用牛市場の関係をあきらかにしたい。そのためには、現地調査によって短角農家の飼養方針を詳細に調査する必要がある。そこで、ここでは次回の調査にむけて、ある事例を紹介して、この問題に対するアプローチの視角を示しておきたい。

近年、短角牛の子牛価格は上昇傾向にあり、高値で安定している。しかしその比較的好条件にもかかわらず、40才代前半で身体が健康なKが2年前(2005年)に短角飼養をやめてしまった。Kは安家でも「熱心で、いい牛飼い」だと評判の人物だった。Kは短角牛飼養をやめた理由について、「今の牛はどれも同じような値で取引されるので、牛を育てる楽しみがなくなった」「一発逆転の夢がなくなった」

と述べている。

Kのことばの意味するところは、短角牛市場の変遷をみることで理解できる。すくなくとも資料が得られた 1950 年代中ごろから 1980 年代後半まで、短角牛の子牛の価格は幅広い分布をしており、たとえば、よいと認められた牛なら 1 頭に約 90 万円の値がついていた。しかし現在の子牛の価格はその体重に比例しており、分布の幅は小さい。つまり K は平均的に高値で安定していても、体重だけで価格が決定されるという評価の基準に失望して、短角牛の飼養をやめたのである。

次回の調査では、この事例にあるような短角牛飼養の方針や動機について、経済的、非経済的な面をふくめて、さまざまな角度から検討したい。

なお前項の表 1 のデータは、本来ならば畜産学的、統計学的に分析しなければならない。しかし現段階では、まだその処理ができていないので、これを早急にすすめるべき課題としたい。